



JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

## 首席指揮者ピエタリ・インキネン任期延長記者会見レポート

2018年6月15日（金）アークヒルズクラブ

### 登壇者

ピエタリ・インキネン（首席指揮者）

平井俊邦（理事長）

益満行裕（企画制作部部長）

井上裕佳子（通訳）

司会：まず登壇者を紹介させていただきます。

首席指揮者ピエタリ・インキネン、理事長の平井俊邦です、企画制作部部長の益満行裕です。

それでは理事長の平井より、首席指揮者ピエタリ・インキネンの任期延長についてお話をさせていただきます。

### ■ピエタリ・インキネン 首席指揮者任期延長について

平井：本日はお忙しい中、また足元の悪い中たくさんの方々にお集まりいただき、ありがとうございます。今日は、首席指揮者ピエタリ・インキネンの契約延長の発表でございます。首席指揮者のピエタリ・インキネンとは16年の9月より19年8月までの契約をしておりました。この契約を2年間延長しまして、21年8月まで延長いたしました。

ピエタリ・インキネンは2009年の9月より首席客演指揮者として日本フィルと関係ができて、そして2016年9月に首席指揮者に就任しています。これまでラザレフ効果として評された高い演奏水準のさらなる向上を務め、指揮者とオーケストラのパートナーシップ、これを重視して、共働姿勢を強めてまいりました。

インキネンの描くより深い重い音色、透明性のあるより豊かな響き、それから表現力の獲得に取り組んでまいりました。今後はヨーロッパ公演を目指しまして、この集大成を図りながら、ワーグナー、シューベルト、メンデルスゾーン、そして後半はベートーヴェン、ドヴォルジャークといったオーケストラ・レパートリーを中心に、またドイツ・ロマン派の音楽への深い取り組みを続けてまいりたいと思っております。その中で透明性、エレガントな響きというものを、また自発的なサウンドづくり、これによってオーケストラの個性というものをより明確にしていきたいと考えております。

2009年から始まりましたシリーズでは、シベリウス、マーラー、ワーグナー、ブラームス、ブ

ブルックナーを中心とした演奏をしてまいりましたが、今のような新しい展開をしてまいりたいと思っております。インキネンさんの延長については本人から抱負を話してもらいたいと思います。

#### ■幅広いレパートリーで、音楽の質と表現力、すべてを高い水準に

インキネン：皆様こんにちは！足元の悪い中お越しいただきありがとうございます。今までの日本フィルと私の関係、非常に実りの多い関係でありましたが、そして今後の関係をお話しする機会を持たれたことをとても嬉しく思います。

私と日本フィルの関係というのは、2008年初めてこのオーケストラを指揮した時から始まりました。演奏したのはチャイコフスキーの4番とシベリウスだったと思います。そしてこのチャイコフスキーの4番というのは、今度のヨーロッパ公演でも演奏する曲に入っておりますので、私たちの関係の象徴、ともいえると思います。

10年以上も前の話になりますが、初めて共演した際、オーケストラの皆様とのつながりに非常に興奮を感じました。それから間もなく首席客演指揮者というタイトルにご招待いただき、すぐにそのお話を受けることになりました。

この長年の関係の間、私たちは幅広いレパートリーを取り上げてまいりました。皆様ご記憶にある通り、シベリウスは活動の非常に大きな部分でもありました。もちろん交響曲はすべて演奏し、録音もしましたが、コンサートホールではめったに耳にすることのないような作品も取り上げてまいりました。そしてこの日本フィルとシベリウス、世界的に見ましても、ほかのオーケストラとは違う個性をしっかりと認識されていると思います。それには、日本の文化のありかたが非常に重要だと思えます。実際、楽員の感性、細かい部分に対して洗練されたセンス。この空気感、音色に繊細な反応してくださる、こういうものすべてがシベリウスの世界というものを際立たせていると感じています。ですから私たちがヨーロッパ公演にシベリウスの交響曲第2番を持っていくというのは自然な流れと言えます。オーケストラにとっても、フィンランドで演奏するということは、大きなことになるのではないのでしょうか。

また他にもマーラーの交響曲はほとんど演奏してきました。それから、中央ヨーロッパのレパートリー、核の部分にどんどん迫ってまいりました。ブルックナー、ワーグナーに進みますと、今までとは違う音色、色のパレット、力というものが必要になってきたのです。そしてその進化のプロセスというのは今後も続いていくものだと私は考えております。ブルックナーの交響曲というものこれから取り組みを続けたいと思っておりますし、今後将来的にもワーグナーのプロジェクトがまたできないかと考えております。幅広いレパートリーを取り上げることで、オーケストラを大きく前進させることができると考えております。その試みを通して、このオーケストラの新たな高み、そして音楽の質と表現力、すべてを高い水準に持っていきたいと私は考えております。

#### ■2019年4月に第6回ヨーロッパ公演へ

インキネン：日本フィルとしてのヨーロッパ公演は今回が6回目となります。前回から13年ぶり

です。そしてこれからは「初」がいくつか続きます。私たちが一緒にヨーロッパをツアーするのも初めてですし、日本フィルがフィンランドに行くというのも初めてです。これは非常に面白い経験になると思っています。というのも、演奏する都市のひとつがフィンランドの南東にある小さな街、私の出身地コウヴォラです。これは街にとっても非常にレアなイベントということで、盛り上がるのではないかと、今から想像しております。

もちろんフィンランドではヘルシンキにも訪れます。首都での演奏というのも楽しみにしています。このツアーが実現する2019年は特別な年でもあります。日本とフィンランドの外交関係樹立100周年記念でもあり、また日本フィルの創立指揮者渡邊暁雄さんの生誕100年でもあります。とても祝祭的な1年になると思います。

このツアーでは、3人の素晴らしいソリストを迎えることになっております。ピアニストのジョナサン・ビス、ジョン・リル、そして最近非常に注目が集まっておりますチェリストのシエク・カネー＝メイソン。彼は最近ではハリー王子とメーガンさんのロイヤルウェディングで演奏したことで一躍有名になりました。コウヴォラでもエルガーの協奏曲を演奏してもらうことになっています。

ヨーロッパ公演のほかのプログラムといたしまして、もちろん日本の曲、武満徹さんの「弦楽のためのレクイエム」を演奏いたします。そしてラウタヴァーラの最後の遺作。これは近年我々がアジア初演を行った作品です。ラウタヴァーラは私の非常に親しい友人でもありました。彼が亡くなる直前にこの曲を書き上げた。これは本当に幸運なことだと思っています。この作品もヨーロッパ公演でも演奏する予定です。そして二人のピアニストは交互に演奏することになりますが、演奏するのはベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番になります。

フィンランド以外では、ドイツ、オーストリア、イギリスに行きます。詳細、資料見てくださいね（笑）

ツアーが終わりましたら、日本に戻ってきて凱旋コンサートを行います。これはツアーで演奏した曲目を取り上げるつもりでいます。やはりツアーに行くというのは、どんなオーケストラにとっても素晴らしい機会だと思っています。海外の方たちに私たちの進化、今の状態を見ていただく素晴らしいチャンスです。そしてこれは楽団と私の関係をより深めていく意味でもより大きな意味があると思います。このような集中した演奏ツアーを行うことで、一人一人の人間との間にある絆が特別なものになってきます。しかもプライベートで長い時間を一緒に過ごす、これは今後の音楽づくりに大きく貢献していくものではないでしょうか。私は個々の楽団員とより親しくなることで、さらによい結果が生まれると思っています。このツアーを通して、より強いチーム作りができると思っています。

#### ■2019年6月、日本・フィンランド外交関係樹立100周年を記念して

インキネン：2019年の6月、日本・フィンランド外交関係樹立100周年を記念したコンサートを行います。6月7日、8日のサントリーホールでの東京定期演奏会では、湯浅譲二さんの《シベリウス讃—ミッドナイト・サン》（ヘルシンキ・フィルからの委嘱作品）を演奏いたします。またフィンランドの指揮者・作曲家でもあるエサ＝ペッカ・サロネンのヴァイオリン協奏曲を。これは昔からの古い友人でもある諏訪内晶子さんがソリストとして演奏していただきます。さらにシベリ

ウスの名曲、もう一つの交響曲と言われている組曲《レンミンカイネン》も取り上げる予定でいます。

翌週の6月15日横浜みなとみらいでの横浜定期演奏会と、翌日の16日サントリーホール（名曲コンサート）では違うプログラムを演奏します。そこではシベリウスを取り上げたいと思っております。その時にソリストとして出演してくれるのが、ヴァイオリニストのペッカ・クーシストです。彼は1995年のシベリウス・コンクールで優勝したヴァイオリニストです。彼と日本で共演するのは初めてとなります。実は私が若いころ、15、6歳でしょうか、ピアノ五重奏を彼と一緒に演奏しておりまして、もう何十回と彼とコンサートで共演してきております。最近はお互い忙しくてなかなか会えないのですが、今回彼がどのようなシベリウスを聴かせてくれるのか、今から非常に楽しみにしています。16日のサントリーホールでの公演では、シベリウスの5番ではなく、ドヴォルジャークの《新世界より》を演奏いたします。この作品を日本フィルと演奏するのは初めてです。

#### ■チェコのレパートリーとベートーヴェン

インキネン：そして2019年9月からは、私がプラハ交響楽団との仕事によってなじみが深くなった、チェコのレパートリーを取り入れていきたいと思っております。もちろんこのチェコのレパートリーというのは、ほかの作曲家とは違う、様々なクオリティが必要になってきます。民謡に影響を受けた音楽、表現力、ルバート（※）というのも独特です。そしてドヴォルジャークなどが生み出しました、独特な旋律やハーモニー、それをどのように日本フィルの中に取り入れていけるか、どのように表現していくか、今後がとても楽しみです。めったに演奏されないドヴォルジャークの序曲などを演奏したいと思っております。

また2019/2020シーズンは、ベートーヴェンにフォーカスします。もちろん生誕250周年ということもありますが、それだけが理由ではありません。私たちはたくさんレパートリーを取り上げていましたが、意外とベートーヴェンは演奏をしていないのです。唯一演奏したのが、交響曲の第9番です。だからこそ今ベートーヴェンを取り上げるのは良いタイミングではないかと思っております。もちろんこのベートーヴェンを取り上げるということは、いつの時代においても素晴らしいことなのですが、オーケストラのアンサンブル力をはじめ、様々な様式や、洗練された部分、表現力、英雄的な部分、ワイルドな部分、このようなものをすべて取り上げられる、特に彼の交響曲の奇数のものからは本当に学ぶことがたくさんあると思うので、オーケストラの基本を壊すことのない形で冒険してみたい、様々なことを試みたいと思っております。

そして忘れてはいけないのは、ベートーヴェンのピアノ協奏曲です。世界的に著名なピアニストを迎えて演奏をしたいと思っております。

19/20シーズンではブルックナーのシリーズも続きまして、今度は4番《ロマンティック》を取り上げる予定です。その翌年に、またベートーヴェンのツィクルスが続きと考えております。

私は今からのこの様々なプログラムをとっても楽しみにしております。ぜひ皆様もこの冒険に参加してください。ありがとうございます！

司会：企画制作部部長益満より、補足させていただきます。

#### ■東欧のプログラムとベートーヴェン

益満：ヨーロッパ公演ですが、欧州ツアーとしては13年ぶりとなります。直近の海外ツアーとなりますと、2011年3月、東日本大震災の翌週に行った香港以来という形になります。実は今年の11月に我々韓国ツアーに大植英次さんに行く予定です。そのあとにこのヨーロッパ公演、ということになっております。今回のヨーロッパ公演、全部で10か所、国としてはフィンランド、ドイツ、オーストリア、イギリスという形になります。先ほどマエストロもおっしゃっていましたが、日本フィルは非常にフィンランドと縁が深い、ルーツだと言いながら、今まで行ったことがなかった。一番近くてエストニアまでは行ったことがあるのですが、フィンランドに行くのはこれが初めてということで、非常に重要な意義があると思います。

日本フィルはフィンランドとのつながりもあるのですが、特にオーケストラ分裂以降の東欧の指揮者との縁も決して忘れてはなりません。スメターチェクさんとか、ビェロフラーヴェクさんとか、ルカーチさんとか。こういった東欧系の指揮者との取り組みをずっとしてきたという軌跡もあるのです。そういった意味でも、シベリウスの後に東欧系の作品に取り組むというのは歴史的にも意味が深いのかな、と思っております。また、日本フィルはプライベート版を除いて、シベリウスの交響曲全集を3種類、渡邊暁雄さんと2種類、インキネンさんと1種類出しています。一方日本フィルは創立してから62年もたつのですが、ベートーヴェンの全集をレコードやCDで一度も出したことがないんですね。そこからわかるようにドイツ本流のプログラムというのを、（これまでもやってこなかったわけではないのですが）今回改めてマエストロ・インキネンとベートーヴェンを通じて正面から対峙するというのは、新しい歴史を作るという意味で非常に重要ではないかな、と思っております。

#### ■フィンランド大使館とコウヴォラ市長よりメッセージ

司会：今日はフィンランド大使館、報道・文化担当参事官のマルクス・コッコ様にもお越しいただいております。

コッコさん：皆様こんにちは。今日はフィンランド大使館からこの記者会見に出席をさせていただき、皆様にご挨拶をできることを非常にうれしく思っております。今日のいろいろな発表は、クラシック音楽の愛好家、そしてフィンランドの友にとって、とても素晴らしいニュースばかりでした。

マエストロ・インキネンは、国際的な音楽シーンの中で、今最も輝いている指揮者の一人でもあります。ですから、彼が日本フィルとともにヨーロッパツアーの中で、特に日本とフィンランドが外交関係樹立100周年を祝う年2019年に、フィンランドへ来てくださることを大変うれしく思っております。

そして来年はフィンランドと日本の文化交流が今までになく活発になります。日本においては、ムーンから陶芸、建築家アルヴァ・アールトから女性画家たちの作品まで、様々な展覧会やコンサートが日本を巡回し、映画や書籍が発表されますし、現在公表されている以上のイベントや

プロジェクトが加わります。

このような二国間の様々なイベントやプロジェクトを皆様にお伝えするために、フィンランド大使館は、記念のウェブサイトを立て上げます。これは10月初旬には、japanfinland100.jpで皆様にもアクセスしていただけます。このドメインは来週、部分的に、イベントの主催者の方々に向けてオープンする予定でありまして、記念ロゴ使用の申し込みが可能です。私たちはマエストロ・インキネン、日本フィルハーモニー交響楽団が正式な日本フィンランド外交関係樹立100周年の記念プログラムに参加していただけることを大変うれしく思っております。日本とフィンランドの友好を皆様と共に祝っていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

#### 質疑応答

**ベートーヴェンのどの版で演奏されますか。**

いくつかの版で演奏したことがありますが、今もっとも使われているのは、ベーレンライター版ですので、私たちもそれを使う予定です。

**ベートーヴェンで使う楽器などについても教えてください。**

一般的に偉大な音楽と言われているものは、色々なあり方があります。そして日本フィルに関しては、どの編成で演奏するかはまだ確定しておりません。特にツィクルスの場合は、出来る限り安定した形で演奏したいと思います。またより小さなティンパニを使うか、ナチュラルホルン等を使用するか、という点ですが、初期のものであればこれは有効だと思います。しかしベートーヴェンの作品がよりドラマティックに変化していくとともに、楽器もより大きいものが好ましいと思います。今回に関しては、ナチュラルホルンなどは使わないと思います。一般論ではありますが、金管奏者がそのような楽器に慣れているかどうか、ということもあります。私は音楽の水準を重視していますので、今まで弾いたことのない楽器を弾いてくれ、とお願いをすることはし難いと思います。小さい編成でツィクルスをしてしまうと、参加できない楽員が出てきてしまう。それは残念なので、気持ちは大きい編成に傾いています。

**日本の作曲家の若い世代の作品を探す、日本フィル・シリーズの新作委嘱などのご意向は**

もちろん、現代のオーケストラにとっては重要なテーマです。私が首席指揮者を務めているドイツのオーケストラと比べると、国から全てご支援を受けて活動しているオーケストラと、チケットの販売に大きく頼っているオーケストラでは、そのあり方が多少変わってくるのかな、と思っています。私が一番重要視しているのはホールを人でいっぱいにする、ということです。もちろん才能のある作曲家を支援したいという気持ちはあります。ただ、これは非常にデリケートなバランスが必要でありますので、これは日本フィルの益満さんよりお話があるかな、と思います。益満：新しい作曲家に関しては、今でも探しています。もちろんコストの問題などがありますが、機会があればやりたいと思っています。日本フィルは、現在「再演企画」というものを重点的にやっていて、こちらの重要性もひしひしと感じておりますので、昔の良いものは良いもので、しっかりと演奏しつつ、新しい作曲家を探しています。

フィンランドで外国のオーケストラがシベリウス、それも2番を演奏するというのは、よくあることでしょうか？

良い質問です。私自身、フィンランドに行く外国のオーケストラが何を演奏しているのか、復習はしていません。ですが、数年前にウィーン・フィルがフィンランドに行った際、ヘルシンキでロリン・マゼールがシベリウスの交響曲を振る予定でした。なぜ知っているかという、ロリン・マゼールさんがそこで急病になってしましまして、その代役としてラップランドでバカンス中だったサカリ・オラモに電話があって、リハーサルなしでウィーン・フィルを振ったと聞いています。少なくともウィーン・フィルがヘルシンキでシベリウスを演奏した、という歴史は事実です。私は直接聞いていないのですが、おそらくフィンランドのオーケストラが演奏するシベリウスとは違ったものだったのではないかと想像します。シベリウス自身もヴァイオリン奏者としてウィーン・フィルのオーディションを受けたことがあるぐらいですから、実際にウィーン・フィルが自分の曲を演奏しているのを聴きたかっただろうなと思います。

外国のオーケストラがシベリウスを演奏するのは面白いということです。フィンランドのオーケストラとは全く違うでしょうし、日本フィルの音色、スタイル、個性をフィンランドの人たちはとても興味を持って聴いてくれると思います。